

『ポストモダン地理学』再訪

エドワード・W・ソジャ

(長尾 由美子 訳)

要 旨

この講演で、エドワード・W・ソジャは、『ポストモダン地理学』執筆までの大学院生時代からの長い道のりを振り返る。彼は歴史主義の伝統のもとでなぜ空間がいつも無視されてきたかを指摘する。ミシェル・フーコーとアンリ・ルフェーブルとの出会いが、社会生活の空間性についてのヒントを与えた。ソジャは、そうした議論を社会—空間的弁証法、後には3連関弁証法へと進展させ、地理学における空間的転回を導いた。現在では、都市論者ジェーン・ジェイコブスに影響され、都市集積の刺激について再検討している。

キーワード：空間、空間論的転回、3連関弁証法、ポストモダン、歴史主義

まず、皆さん全員に感謝の気持ちを表したい。とにかく本当にありがとう。なかでも特に、日本の地理学および社会学で何が起きているのか、私に非常に興味深い話をしてくれた加藤政洋氏に感謝したい。今日の話は、ある点、私が最初に意図したものと異なるかもしれない。まず、私のアイデア紹介をしようと考えていた。しかし、日本の地理学者の間では、自分たちですでに理解と探究が急速に前進しているように思われる。

また、私の著書翻訳（E・ソジャ、加藤政洋・西部均・水内俊雄・長尾謙吉・大城直樹訳『ポストモダン地理学—批判的社会理論の空間的位相』青土社、2003年、目次は後段でも章の構成が言及されるので、ここに掲げておく。はしがきとあとがき、第1章 歴史・地理・モダニティ、第2章 空間化—マルクス主義地理学と批判的社会理論—、第3章 社会—空間弁証法—、第4章 都市・地域に関する議論—第一ラウンド—、第5章 再主張—空間化された存在論へ向けて—、第6章 空間化—ギデンズの解釈の批判的検討—、第7章 都市・地域再編の歴史地理、第8

章 すべてがロサンゼルスに集まる、第9章 ロサンゼルスを分解して—ポストモダン地理学に向けて—)にかかわった多くの人々に感謝したい。個人それぞれはもちろんのこと、グループとして全員に感謝したい。何名かとすでに話しているが、翻訳という業務がいかに困難かとしみじみ伺われる。今回のキー・アスペクトの一つである、著書『ポストモダン地理学』の再検討についてもそうだ。今日も議論をしたが、地理学における考え方や方法論の展開において、私は言語・ダイアログでもって新たな可能性を再び検討している。

『ポストモダン地理学』の執筆が、ある意味、不満からの執筆でもあるので、議論の順序を変えてみたり、終章を序章に置いてみたり、実に言葉と言語の実験的作業であった。地理学だけでなく他の社会科学でも、英語論文は非常に固い学術的言語で書かれてしまいがちである。不満に思った私は、地理学執筆がよりクリエイティブで文学的となるように違った方法を刺激できないかと、試行錯誤していたのだ。

そこで私は少しばかり遊んでみたりもしたが、結果的に苦勞し困難は倍増した。英語での理解がすでに困難であり、多くの誤解も生じているのに、別の言語にこれを翻訳するなど、私の想像を絶するような苦勞であったろう。長尾謙吉氏に特に感謝したい。テキストに無数の黄色い下線をひいて、私がいったい何を言いたいかを把握するため、かつそれらのできる限り近い意味合いの日本語は何かを考え出すために、何度も何度も訪問してくれた。君の努力・翻訳作業に本当に感謝している。続編著書の翻訳がより容易であるとよいのだが。これらのほうがもっと率直だと思うし、本日の話で、『ポストモダン地理学』での議論にも戻りつつも、そのことがより明確化されるよう話ができれば、と思う。

『ポストモダン地理学』にいたる前歴

私は、同一著書を過去15年間ずっと書き続けているといっても過言ではない。3冊出版したが、その中で私は著しく似通った議論をしている。といっても、新しく、かつ異なった方法ではあるが。私の研究人生で、要は2つのポイントを指摘したいのだが、それらは廣大無辺でもあるのだ。一つは、地理学的視点は非常に重要で影響力があり、いかなる分析や研究にもそれが不可欠であるということ。一般論的にも空間を単に考慮するというのではなく、空間的視点を持って検討するということである。『ポストメトロポリス』が出版されるころには、この議論は大いに進展した。しかし、私がこれに関する究極の論文を発表したのは、もっと以前で、私が博士課程で研究をしているところだった。

私は、政治学とその分野の人間を納得させようとしていたのだ。当時の政治学では、第三世界での国家建設研究や、政治学でも比較政治学と呼ばれる独立国家の研究が主流であった。しかし、彼らは空間的視点に対して大きな関心はなかった。私の処女論文はアフリカにおける国家建設であったが、その中で、私がむしろ意図したのは、国家建設とナショナリズムへの地理学的アプローチであった。

博士論文で、私は政治学の人間に空間的視点の重要性を指摘したかったのだ。論文内で私は従来の記述的地理学と、新しい計量的理論的地理学の狭間にいたのだ。というのは、大学院で私の指導教員は2人いて、ひとりは、アメリカの歴史・文化地理学でおそらく頂点に立つ、ドナルド・マイエック。もうひとりは、おそらく皆も知っている、当時トップのひとり、若き計量学地理学者のピーター・グールドである。彼らは私のよき理解者でアドバイザーであった。しかし彼らはお互いに完全に異なっていた。

卒業論文は、この従来の地理学と新しい地理学それぞれの最良点の統合の試みでもあった。もちろん、見せ所は空間的視点の影響力の強さであった。その後今にいたっても私はそれを拡張された形で続けており、私の著書はすべて、人々に空間的考察を推進したいがために書かれているといっても過言ではない。なぜか。それは大いに役立ち、助けにもなるからだ。空間的に物事を考え、飛躍するためだ。先ほどもいったが、私は別の場、方法で何度も何度も繰り返してそれを議論し続けてきた。そしてそれはついにクライマックスに達したのだ。恥ずかしながら、著書『ポストメトロポリス』で、である。東京での会議でも話したが、一万二千年の歴史の人間社会のあらゆる主要な出来事は、空間、空間形態、人間社会の空間によって部分的には形成されたうえ、事実、空間によって具体化され、動かされてきたのだ。社会に創り出された空間的組織は、多く、都市、都市での刺激、シニキズム(Synekism)とも言える空間的集積を通して形成されたのである。非常に大きな原動力なのである。なのに、この革新的で創造的な原動力がずっと社会発展に関する歴史著作では見過ごされてきた。しかし今になって新たに、空間論的転回は、最も有効な空間解釈として突如再発見されたのだ。

農業の前に都市形成があったという考えから始まり、そしてそれは農業革命の説明のための地理学的内容においてあった。そして、古きは産業革命および現在の状況は、人間生活の空間性、中でも特に都市の空間性から出た創造的原動力に生み出されたと考えた。そして『ポストモダン地理学』は、この議論で新しい検討法を

表した。私は1980年代の著書で書き続けた。まず、社会－空間弁証法にはじまって、人間生活の空間論に続き、地理学の再理論化の形成に進行した。私の議論の根底には、当時の地理学で最も刺激的なことに對する失望であった。それはマルクス主義地理学の発展であった。それは大まかに デイヴィッド・バーヴェイが『社会的正義と都市』を出版した1973年と重なる。この著書は、地理分野に大きな影響を与え、ある一種の主要分岐点ともなった。東京でも簡単に話したが、アフリカの研究で私はこれを論議しはじめた。私の博士論文は、ケニアでの近代化に関する地理学であった。

1963年、(23歳の)若輩だった私は、地理学部に属するアフリカ専門の政治地理研究者であった。それが私のアイデンティティでもあった。1972年、私は、都市計画学部に所属するためロサンゼルスに移った。それは私にとっての分岐点となった。1970年代中、私は自身の解体作業にいそしんだ。発展理論、マルクス主義的發展理論から見た私の業績の批評を読み始めたのだ。それがまた非常に興味深い！マルクス主義やマルクス政治経済の専門家ではない人々からむしろ学ぶことが多かった。私は1972年に、いままでの研究をすべて破棄することにした。

そして1972年から1980年まで私は沈黙し続けた。私はいわゆる遠回りをしていったのだ。私はそれまでの研究すべてを再検討し、結果すべて拒絶した。当時の私はアメリカでも著名な大学で、終身雇用が皮肉にも拒絶した過去の研究成果によって決定されており、安全が確保できていた。私は地理学の別の見方を検討し始めたのだ。

沈黙の後

そして長い沈黙の後、ついに私は、社会－空間弁証法でもってニューオーリンズにて再出版を果たした。私の議論は、そのときすでにマルクス主義地理学にあった。しかし、完全には満足してはいなかった。だれが社会－空間弁証法と名づけたかは記憶にないが、それは当時トピ

アン・マルクス主義(場所性を帯びたマルクス主義)呼ばれた。私は、当時進展しつつあったマルクス主義地理学以上に、より空間的で地理学的なマルクス主義を創りたかった。私の試みは拡張した批評では初めてでもあったので、他の地理学者からの反響は非常に大きかった。中でも私が尊敬する地理学者からも大きな反応がありうれしく思った。彼らにはマルクス主義地理学はあまり関心がなかったのだ。後に、私はマルクス主義地理用語でも特殊な、空間フェチと名づけられた。私はとにかく空間を再定義したかった。私は空間決定論に取り掛かっていた。地理が実際に階級関係を具体化でき、影響すると指摘し、それが正しい方法でもあるとも地理学者たちに論じた。もちろん拒絶された。私は生産の空間的關係が、生産の社会的關係と同等に重要だと主張した。空間及び空間的形態が望ましいというのなら、それは階級のように、社会的形態と同等に重要なのだ。

それは非常に困難な議論となった。まわりの皆の抵抗は強く、一部にしか受け入れられなかった。しかしそれが新たな疑問を投げかけることになった。マルクス主義において、なぜこうも空間的な思考が弱いのかということだ。日本ではどのようなであったかは不明だが、それ以前に当時のアメリカでは地理学が、知的で極めて重要な科目と見なされていなかったのだ。高校では誰も受講しなかったし、大学ではもはやありえなかった。

地理学は非常に陳腐なものに見なされ、地理学部がここ20世紀で事実、多くアメリカの大学で閉鎖されてきた。それは非常に重要性の低い科目で、あまり知的で挑戦的とは見られなかった。地理学はつまらなく、時代遅れな博学的で、記述的な科目と見なされていた。そういった傾向は少なくとも、20世紀後半まで続いた。なぜそうなのか？またマルクス主義で、空間についての思考がなぜこうも困難なのか。そうした中で私は広範に社会理論に大きな関心を持つようになった。いったい社会理論のどこで空間が議論されているのか。あちらこちらから少しは搾り出すことはできても、説明にたるほど十分ではなかった。社会と理論に都市などありはしない。そうならば、そこに都会などあるわけがな

いのだ。

私は1980年代のこの疑問を発した。いったい全体、社会理論のどこで空間が論議されているのか。私の以前の論文にもあった新しい章であるポストモダン地理学の核心で、広範な意義でそもそも何が空間の存在を作り上げているか論議した。この疑問の投げ方は普通の議論の立て方とはまさしく正反対なものであった。言葉の順序通り、人は意識して、はじめて空間の存在を認識する。しかし、この回路を逆にみて、何が空間的思考を妨げるのか、妨げてきたのかと考えたかったのだ。

社会理論における空間の軽視・無視

これは『ポストモダン地理学』で、私にとってはおそらく最もエキサイティングで、最も生成的疑問であった。従来のように地理学は地理的に考えるというのではなく、社会理論およびマルクス主義、私たち自身もなぜこうも空間的次元に抵抗を感じ避けるのかを論議したかったのだ。この疑問で私にまったく新しい道が切り開かれた。ここで大きな影響をおよぼしたのは、ミシェル・フーコーの議論であり、それは著書で何回も繰り返し述べた。しかし最も強力な疑問は、19世紀のフランスの哲学者ベルクソンによる。彼の議論は、ベルクソンにさかのぼるが、いかに時間の再考慮と含意の歴史が、動的で弁証的であるかということである。

従来空間は、固定物、不動、「死」、そしてマルクスのいう Backup (背部) と見なされた。それは単に歴史を理解するに当たって誤解や混乱のもとであった。歴史は「動」であり、空間や地理学は「静」なる背部だった。単なる「容器」や「舞台」などと同じであった。

だから、フランス哲学者ルフェーブルのコメントは、私の中では非常に興味深いものであった。それは攻撃的にも思われた。19世紀後半を揺るがしたこの疑問は、宗教と時間の関係だけでなく、歴史と地理学の関係にも特殊なゆがみを生じさせた。地理学の序章に相当する「歴史」に、である。時間と歴史に対する私たちの思考法、中でも批評的思考、かつ批評的シリーズを

約束していたのに、何かが19世紀後半に生じ、裏返ってしまった。日本、その他のアジア諸国での事情は私にはよくわからないが、少なくとも、当時の西洋、ヨーロッパの伝統の中で、何かが音を立てて崩れていった。

しかし議論自体は、19世紀後半の学术界、詳しくは、大学、研究所、思考法や理論の中で勃発した。伝統、正論の破壊。なんと奇妙な考えか！私が知る限りでは、研究の大小にかかわらず、この変化に関与することになる。過去150年において、これが空間論的転回に関してはもっとも劇的な拡散だと私は考える。過去150年というのは、あることが1850年に生じる。それに続いて後何十年間にわたって、ヨーロッパ的伝統で非常に興味深い事が起きる。それが空間的思考に境界線を張ってしまったことの解釈に関与するのだ。

私は『ポストモダン地理学』で特に歴史主義と称していたが、それは人類の歴史的次元に重点を置くことである。そして空間的次元が存在する。地理に空間を取り入れて、歴史を活性化させる。そして歴史は流れとなり発展する。西洋的社会思考では、こういった考えが当たり前と思われる。空間的な流れなど、20年30年前にほとんど思いもよらなかっただろう。空間的發展とは一体全体どういう意味なのか。空間的原動力でさえもほとんど理解されなかった。西洋的社会思考やマルクス主義的社会思考では、はっきりと拒絶さえもされた。ローカリズム、国家主義、地域主義、環境など地理的思考がわずかにもあれば、敵視さえされた。都市、西洋の社会主義者、反都会、そしてなぜか社会主義視点においても、地理学および社会主義観念論は、不合理までにも非空間的だったのだ。

マルクス主義・社会主義と空間論的思考

このように初期文献・議論を突き進んでいけば、また、デイヴィッド・ハーヴェイやマルクス地理学その後の展開を見れば、社会地理学がどう変化するか想定できただろう。おそらくそれはアナキズムに到達していただろう。そうならば大都市、都市などはありえないし、どう

やってありもしないところに均等に空間配置ができるのか？ばかげている。しかし、これは議論に着実に盛り込まれたのだ。

私はこの時代を検討し始めた。やはり鍵となる出来事は多くあった。一つは、マルクス主義者ヘーゲルへの返答。なぜ今このことを意図的に言い立てるかという、ヘーゲルが事実、空間論者の最後の人物といえるからである。ヘーゲルは、歴史は地理によって運営されている、と謳った最後の哲学者である。マルクスの教子であったのに、ヘーゲルはマルクスとはまったくの逆なのである。二人の興味深い関係は多くの文献に記されているが、中でも唯物論の議論は有名である。マルクスはヘーゲルを理想主義者ではなく、唯物論者とした。しかし私の見方は、マルクスはヘーゲルを結果的に空間論者とし、それなのに、ついにはまったく逆に歴史主義者にしてしまった。そしてマルクスとマルクス論者が支配する非常に狭い歴史主義が発展し、現代に至ったのだ。マルクスに権力が与えられ、空間そのものではなく、空間より時間の方に特権が与えられた。結果、空間は固定された静なものとなり、歴史は弁証法的思考となった。では地理学は弁証法的となるだろうか。ありえないのだ。そうすると社会-空間的弁証法に誰も関心など持たないし、持てないのだ。

「動」である社会的関係が、固定されたものとどうやって相互関係が持てようか。どういうことなのか。この議論から全視点が見出されたのだ。社会学では、社会的思考の形成がはじまっていた。ヘーゲル主義とは異なって、またマルクス主義の話に一步戻るが、マルクス、歴史主義唯物論、すべての科学的社会主義は激しく論争していた。資本主義論や自由主義のブルジョア論など、私自身はマルクスを当初は理解していなかった。

19世紀後半にもうひとつ激しい論争があった。それは科学的社会主義と自由主義社会主義、別名アナーキズムとの間であった。なぜか。なぜマルクス主義理論はこういった無政府主義者たちを改心させたかったのか。その答えとして考えられるのが、一部ではあるが、ルフェーブルが議論にも残しているが、無政府主義者が空間・環境論者で、地理学者であったというの

がある。

言い換えれば、彼らは歴史学者ではなく、地理学者であったからだ。この歴史と地理学の論争は科学的社会主義が噴出してしまいうまで19世紀後半にも及んだ。そして、いわゆる社会主義思考の覇権を握った空間が生まれたのだ。マルクス主義はこのオルタナティブ社会主義理論を抑制した。そうして、歴史主義思考の伝統が確立されたのだ。そして、今、まさに似たような事態が生じようとしている。しかし、ここではリベラル社会科学の形成である。

社会科学の形成と歴史主義の抑圧

社会学、心理学、政治学、経済学、特に人類学は、19世紀後半自らのアイデンティティとともに生まれた。当時ヨーロッパでは歴史学が、自由主義ブルジョア論と社会学思考の再検討の真っ只中であつた。これらの学問の最大のつながりが、マルクス主義であつた。ブルジョア社会思考が分解され、理論による専門化もなく、学問すべてが新たに単一の政治経済学のもとで統合された。

分野それぞれの専門化は、マルクス主義で発生したことに幾分似通っている。社会意志の力、社会的プロセス、人間的プロセス、人間意志、人間意識、合理的経済人、文化的・社会的・心理的プロセスの解放を望んだ。私達個人が、自分たちの社会、経済、政治を、社会的プロセスを通して作り上げたのだ。では逆に何が抑制されたのか。そういったことのほかに、社会的プロセスや、自由、社会活動、環境、背景などが抑制を強いられたのだ。そして、19世紀後半の環境決定論というもう一つの緊迫ある攻勢に対して、動きが生じていたのだ。非常に力強い思考が社会的思考に存在した。

あらゆる形の環境決定論と社会科学の進展は、社会についての理論をある意味消してしまおうということだった。環境が経済の形成を受け入れられるのであろうか、受諾できたであろうか。私が『ポストモダン地理学』で議論したのは、ある意味、社会科学がマルクス主義と平衡して生じたということだ。これは、日本やア

アメリカでのケースにも当てはまるわけではないので、完成した結論ではない。まだまだ研究され、理解されなければならないことは多くある。社会科学の誕生はある意味マルクス主義と並行している。ただしそれは、西洋思考が大部分を占めた、社会歴史弁証の社会的プロセスを兼ね添えた「歴史」とよばれたものである。社会が歴史を形成している。マルクス主義は歴史形成に焦点を当てた。社会、社会的実践、それらが歴史を実際は形成をしている、と。

社会での活動が社会的階層、社会的問題、文化、物質的形態と思考を形成している。これらはすべて、社会的プロセスを通して実施されたのだ。そうして地理が固定され死んだものと見なされたのだ。何度もいうが、私が考える中でこのポイントが最も重要で、影響力のある議論なのである。そして私は『ポストモダニズム』の執筆を始めるのだが、それ以前に別の方法で何度も何度も同じ議論を繰り返してきていたわけだ。しかし、ここで違うのは、単に空間を考慮するか否かの問題ではなく、また、少しばかり地理学を導入すべきということではない。空間を扱っている、地理学に携わっている、といいたいがために、特別な隠喩と派手な言葉を加えるべきということでもない。

デイヴィッド・ハーヴェイとともに書きあげたフィクションや、歴史主義の一環でもない。私が彼と、もう1人別のマルクス主義の友人と共同執筆をしていたのだが、ここでお互いの意見の相違が生じた。マルクス主義的思考の基礎形成に関して、根本的な再検討の必要性について、どの程度書く必要があるのかという点で、である。私は、非常に、実に非常に困難となるであろうといった。しかし、デイヴィッドは、頭が聡明であれば、やさしいのではないかと言った。そしてこれが、出発点につながっていった。1980年の終わりころ、再度私に筆を取らせたのであった。そしてこの出発が、もう一つの議論の、認識論的批評と関連する決定的な議論につながっていくのだ。

この歴史的、歴史主義の批評がここにある。そして、過去150年もの間に生じたことを理解しようとする、地理学的思考が困難となる。そして、認識論的批評が私をポストモダン地理

学に導いたのだ。これが当時文献の中心であり、ポストモダンと定義すらしていたのだ。西洋における認識論的議論を生み出した文献である。科学認識論の一部、マルクス主義認識論、そしてすべての現代認識論は不十分であった。ベルクソンやその他の学者が批評的現実主義で同じような内容を記述していたが、「ポストモダン」とすでにラベル付けされたものからではむしろなかった。

しかし基本的には、現代認識論すべてが不十分だということであった。私たちがすべきことは、認識論をより深く批評することだ。そうすることで、長年放置されていたことを取り上げて次の段階に進行できる。別のよく知られた表現を使えば、これは「他者」に関する有名な議論である。他者とは、決して話題にもされなかった人々、世の沈黙部を指す。

フェミニストやポストモダン学者たちに導かれ、私は政治運動家のごとく、この西洋歴史を再検討せよ！地理学が放置されてはいけない！と説いた。並行してジェンダー研究も放置されていた。もちろん、「他者」に関して複数の議論があった。歴史という舞台の中での黒子、裏方俳優だ。歴史的テーマとして取り扱われなかった人。この期に再現表象の批評、アイデンティティ等の問題が生じた。私の場合は、ポストモダニズムとなった。私は認識論からの攻撃、批評も受けた。この著書が『ポストモダン地理学（複数形）』と名づけられた最大の理由である。地理学にはさまざまな異なるアプローチが存在する。批判的人文地理学内で限定するのではなく、地理学をより拡張された段階にまで引き上げる必要性があったのだ。

不十分な認識論を克服するために

ところで『ポストモダン地理学』で、今日に至っても私がカルチュラル・スタディーズに関してはほとんど発言しないことに気づいたのだろうか。開発研究で、私はエドワード・サイード、学者仲間、そして旧友たちに批判された。あるときサイードが驚いて、なぜ君はポストコロニアル研究に関して何も書かないのかねと聞いた

くらいだ。しかし認識論的批評は、『ポストモダン地理学』について当時は相当論議含みなものであった。ちょうど私たちが間違っ、不十分な方法で、独自の類似物を作成していたころだ。

マルクス主義、科学的地理学、なんでもいいのだが、人類学、社会学、経済学などなど、すべてが不十分な認識論に固まっていた。だから理論の中で何か欠けていた。他者とジェンダー、人種、経済格差が欠けていたのと同じように、空間と地理学も認識論の中で、その存在を主張したかったのだ。

批判的リアリズムについて話そう。認識論の議論は中断しなければなかった。全認識論を改善するほどの十分な知識がなかったからである。だから認識論についての話をやめるが、これがある意味、認識論的危機として認識だけはすべきである。では認識論的危機の下で、私たちは何をすべきなのか。これがポストモダン地理学において、また全分野において、哲学的意味で中心的ポイントとなる。視点の多様化がまずあげられる。これはいまでは危険行為と見なされる。というのは、こういったメタ言説やマルクス主義者による認識論の統合などは、もはや説得性がないからである。

科学者が、問題があるなら金と時間をくれ、いくらでも解決しよう、とでも言うように、マルクス主義者も同じようなことを唱えた。社会におけるどんな問題でも提示してくれ、いくらでも説明して見せよう。それが9.11であろうが、第二次世界大戦であろうが何でもである。認識論は都合よく私たちにすべてを答えてくれる。だから批評されたのだ。政治問題・人間問題に関して、正統マルクス主義者がどうやってこのポストモダン認識論批評ができればよいか。ナンセンス、混乱そのものである。逆批評のようなものだ。

認識論に何の間違いがないとしても、すでに答えは見つけ出されていた。それは鮮やかにデイヴィッド・ハーヴェイによって調整された。しかしまた、ここで分裂が生じる。個々の主張が結局は基本的な問題なのだ。結局、認識論を批判的に再考しなければならぬのだ。では方法は何なのか。政治的作業はどうか？方法は簡単

である。既存の認識論から利用できるものを何でも選び抜いて適応させるのだ。この折衷主義は少なくとも学問分野化されたもので、今日まで地理学では時には最新のポストモダンのアプローチ法として継続している。

この方法は、現在ほとんどの地理学者、中でも優秀な地理学者が実施している方法だ。マルクス主義の偉大な業績を盗み取ったり、フェミニズム、文化批評など少し足したりするなど、個々のプロジェクトに最も有効利用できるよう改良するのだ。これも事実、一つの議論である。

もう一つの議論は、私が以前始めて現在にも継続しているものである。世界を理解するのに導く法則が認識論であれば、アンソロジーは認識論の存在を許可しているものである。アンソロジーが認識論に先行する。アンソロジーが基本的には世界、および人間の存在についての声明文そのものである。それは必需のものであり、そのおかげで世界知識の構築が可能なのだ。

世界知識の構築とは認識論である。よって認識論が直面した危機に、アンソロジーを正すためアイデンティティの必要性があった。この議論は著書『ポストモダン地理学』の第3章、4章、5章で書いている。これは、いわゆる認識論で固定すること、固定を試みることであった。実に単純な作業であるが、私が成し遂げた最も哲学的、理論的考察といえる。

この考察が指摘、挑戦されたうえに、よい議論が出たならば、私がいままで記した全議論が崩壊するであろう。それはありえない。というのは、これは実に単純・論理的なもので、私はアンソロジカルな3連関弁証法(Trialectic)と呼んでいる。いわゆる弁証法が偏狭的に2面のみ扱うならば、私はむしろ第三面を取り上げ、統合させたい。しかし当初から弁証法は、世界は同時進行で、存在するものすべては常に3次元性であったと強調していた。次元という表現だが、言い換えれば存在するものすべては社会的ということだ。もし社会的でなかったら、私たちの存在などありえない。

実に当たり前のことだ。存在するものすべてはまた歴史的である。過去150年、もしくはそれより以前にそれは明らかとなった。なぜか。私たちはいつも「死」を意識しているからだ。

私たちが時間に身をゆだねて生きているのは明らかだ。簡単なことである。しかし、第3の議論は、存在するものすべては、同時に空間的ということである。これは地理的ともいえよう。まさに私が強調し、探しつづけた議論である。

『ポストモダン地理学』は、2本の主要な足で立たせている。2つの主要部分とは、社会、空間は弁証的であるか。社会が空間を形付け、そのことが、空間が社会を形付けたことに付け加えられたのか？それらは相互に生産的方法で行われたのか？

ルフェーブルとフーコーに出会って

歴史と地理学が同等な権力かという論争の歴史主義の評論で同じような議論があった。地理学が歴史を具体化したのか。そして同じように歴史が地理学を具体化したのか。そのときから私は決心した。二度と、歴史と地理を単独で記述はしまい、と。そして、歴史地理学という言葉も使用しよう、と。これは決して容易ではない。

3連関弁証法(Trialectic)の別な方法はすでに定評があり、確立されていた。社会、歴史社会の関係はすでに弁証法的とされていた。よってアンソロジカルな定着でもあった。この研究で空間的思考を、歴史的思考と同等に重要で強力であると証明しなければならなかった。

1段階戻ることになるが、1960年代終わりから70年代初め、主にフランス・パリで、興味深い事態が発生した。私はあまりうまく説明はできないが、少なくとも2人の人物が同一の議論を行った。これはすでにポストモダン地理学の一環と呼べよう。ルフェーブルとミシェル・フーコーの2人である。

二人はそれぞれ私とまったく同一の議論をしていた。存在するすべては相互に、社会的、歴史的、空間的ということである。しかし、均等に重要であるこの3点をバランスよく捉えるには、空間に対する思考をかえなければならぬということだった。なぜかという、空間を固定したものとかつては見なしていたからである。

そのうえ、そこには多くの実質的問題が存在しているからである。よって60年代、2人は、空間論者、建築家、都市論者、地理学者すべてを拒絶した。彼らの空間的視点は不十分であり、不自然であったのだ。といっても、すべてが悪いというわけではなく、むしろ単に限定されていたのが問題だった。従来の空間論者は、空間的視点を再検討しなくてはならなかった。現在地理学者や学界は、ルフェーブルやフーコーの指摘したこの箇所を無視している。「地理学や建築について何かいいことを言っていたようだ」という程度である。しかし、私たちは幸運にも正当な主題を目前にしている。この現象は実に最近10年の話だ。西洋におけるすべての空間的思考に対する強力な批評があったが、それは十分ではないと、今やっと認識しはじめたのだ。

『第三空間』への注目とは、従来受け入れられた議論を超越し、地理学的想像力で地理学的思考をさらに拡大するということだ。非常に挑戦的であるからこそ、この『第三空間』に対する多くの怒りの声があるのだと思う。私はそれこそ空間に携わる他の地理学者ひとりひとりを批判してまわったのだ。空間を考慮したいのなら、彼らは地理-現代の今日的な隆盛を基本的に超越すべきで、空間的思考の重要性と歴史的思考の重要性とを同等化しなくてはならないと強調したのだ。人はみな、何に関しても歴史が最善の洞察となると考えた。地理学も同等に強力な洞察となることを教えたかったのだ。

それを実行するには、空間的思考に頼るしかない。こちらはうまく進展し始めている。さて、ここでは問題を変えて、もう一つ明らかに関連する別の話をする。これは、『ポストモダン地理学』にもあり、また、私が現在も研究中の都市と都会の新しい見方である。

ロサンゼルスでの経験

私は常に経験的議論に関連した理論的議論をしている。主にロサンゼルスについてであろう。ポストモダン地理学思考と認識論批評との相互連結、そして、再編概念にフォーカスをあてた

新しい経済地理の初期展開の発端が、当時ロサンゼルスで起きていたのだ。

再編という用語を初めて私が使用したかもしれない。1983年「都市再編」を発表した。社会的空間の変化は、ロサンゼルスで同じように起きていた。私は都市学プログラムで、少なくとも学生や同僚を通じていつも政治活動に参加していた。彼らは常にロサンゼルス社会に深く関わっていた。当時私はある記事を発表し、それに関して地元組合団体が接触してきた。団体は、組合とコミュニティ連盟で、工場閉鎖反対連合といった。当時はちょうどロサンゼルスの脱工業化の時期であった。この連合やコミュニティ団体、そしてほかの組織は私に尋ねた。「工場閉鎖反対に、どうやって人を集めて、闘えばいいのか」。

当時のロサンゼルスでは、フォードの関連工場をどんどん閉鎖していた。全国第2位規模の自動車産業が消え失せようとしていた。タイヤ産業、フロントガラス、シールド工場などフォード関連の主要工業がつぶれていった。組合員がこの都市計画学科に押し寄せ、助けを乞った。私たちはこの労働者たちにどう対応してよいかわからなかった。なぜなら、同時にロサンゼルスが失業トップ地域と変貌しつつあったからである。

1970年代、80年代初頭は、何百万もの仕事が発生していた。組合や組合のある工場働く人々は、「職を失っても大丈夫だ。そこいらじゅうに仕事があるらしい」と楽観的に話していた。その仕事というのがまさか3分の1の給与で、手当ても組合もないマクドナルドのような単純労働とは知る由もなかったのだ。

彼らはロサンゼルスの経済を研究し始めた私たちの学部に詰め掛けてきたのだ。2つの大事件が生じている。一つは工場閉鎖、もう一つは雇用機会のプールである。こうして、私たちは都市再編の概念へと便乗したのだ。まずマイケル・ストーパーと研究をはじめ、他の研究者たちも加わった。後、マイケル・ディーアも大きな関心を示すようになった。これがポストモダン地理学議論にあったもう一つのエピソードである。

『ポストモダン地理学』のなかで、唯一実際

にポストモダン地理学的な章は、ロサンゼルス分解を扱った終章である。この新視点をロサンゼルスの解釈に実際採用したのはこれが初めとなる。1983年出版の私の著書で使われた、都市の政治経済に関する従来の法則の力に常々不満を感じていたのだ。

これは都市の政治経済においてかなり標準的なことだ。マルクス主義地理学者や、より正統派マルクス主義者に、1983年出版論文はかなり評判がよかった。しかし1986年の方はまったくだめであった。ロサンゼルス分解、それはいったいどういうことなのか？

前章では、「すべてがロサンゼルスに集まる」であった。これは私にとって全体論的なマルクス流思考であった。最終章で、私はばらばらに分解することに決めた。そしてその破片をまったく違うやり方で組み立て、そこに別物を加えたのだ。これが最初の都市再編と都市変更に対するポストモダン分析という新しい方法になった。

もう1度念を押すが、これが第2の潮流となった。もちろんこれは、第1と密接に関係している。ロサンゼルスの経験的事実から理論を証明するために、私はうるさく食って掛かった。同じくロサンゼルスを扱ったデイビスの本ほどよくは売れなかった。それは理論的に重すぎたのだ。

空間論的転回

そろそろ話しを終えるにあたって、『ポストメトロポリス』の議論を少しばかり、それとまた最初に戻ろうと思う。ここで私は空間論的転回を強調したい。この関連を追究するに当たって、私は日本の地理学会にこの空間論的転回を、ぜひ紹介したい。日本だけでなく、アメリカ地理学、ブラジル地理学、サウジアラビア地理学でもなんでもいい。私は切にさらなる前進、追究をみなさんに促したい。空間論的転回をさらに進展させるのだ。すでに認識している現時点の転回で決して満足してはならない。

行き先、すべきことはまだまだ沢山ある。何を専門としていようが関係ない。『ポストメト

ロポリス』は、おそらく私の著書の中では最も意欲的なものであろう。私は問題提起し、そこにわざと自分を陥れているからである。今日の話しの復習をおおまかにすると、自身の研究、専門、講義を空間化させなければならないということだ。歴史的、理論的理由、そして認識論的批評のためにも、空間化させるということだ。しかし、私自身はいったい何が空間的視点で、新しい洞察が人間にとって劇的なのかをきちんと表現してはいない。というのは、歴史主義の批評が正しかったからだ。言い換えれば、私たちの全歴史で何か欠けているということだ。この欠けている何かは、歴史を通して起きてきたすべてを理解する際、極めて重大なのだ。それは私たちの全歴史で何かを逃すことを意味する。驚くべきことに、それは今でも起きている。

思考を空間化するのには長い道のりがあるといったが、それはそういう意味だ。基本的に議論自体が弱点の多い潮流なのだから。そして、ひとは単純に私に言う。「わかった、ソジャ、じゃあ著書を出してくれ、ただし理論的議論ではなく経験的分析に基づいて」そして、経験的分析を批評してくれ、と。今そしてその約束を守ろうと、『ポストメトロポリス』で著したのだ。この『ポストメトロポリス』であるが、もともとは『第三空間』の一部であった。これをご存知かは知らないが、出版社で大きすぎるので2分割するように言われたのだ。

『第三空間』だけを読んでみるとそれだけで成り立ちそうなので、『ポストメトロポリス』は非常に早く編集できた。しかし、『ポストメトロポリス』に取り掛かっていたとき、すばらしい発見をした。突然一万二千年の人間の歴史の中で、都市の起源に関する新しい議論に出くわしたのだ。西洋においてではなく、全社会の歴史、人間社会の歴史の中である。一万二千年前ものことが隠された神秘のように、突然ひらめきをくれたのだ。そしてそれは奇妙なことに、考古学を通してなのだ。

『ポストメトロポリス』を終わらせるのに、2年間サバティカルを取った。その期間中、むしろ私はこの別の議論に向かっていた。そしてこれは、都市の起源に関する議論とともに『ポストメトロポリス』の第一章で扱われている。

すべて議論のみで書かれたのは、自分がきちんと知りもしないのに深入りはできないと感じたからだ。今後は新たに都市の起源に関する地理学議論は書きたくないと思ったので。そして、そうするうちに奇妙だが、ある人物を通じて新たに発見したのだ。ルフェーブルやフーコーが60年代や70年代初頭に記述したことだけではなかったのだ。

J・ジェイコブスに刺激され

ある人物とは、非常に有名な都市論者、ジェーン・ジェイコブスだ。ジェイコブスは、1969年に『都市の経済』という著書を出版した。彼女は空間という地理学的用語は使用しなかったが、非常に興味深いことを書いている。都市経済生活から生じた何か火花のようなものが、アーバニズムと都市の性質そのものである、と。全人間社会におき、これがもっとも重要な発展進化力だと彼女は書いている。1969年、ジェイコブスが最初に一万二千年もの歴史をさかのぼった張本人である。残念ながら発表当時、人類学者、経済学者は彼女に耳を傾けるどころか、嘲笑さえした。

しかしついにその議論があるときの射たことを、私は鮮明に覚えている。私はたまたまアラン・スコットと話していた。彼にジェーン・ジェイコブスとの奇跡的なめぐり合わせについて話すと、偶然にも、彼が取り組んでいた『新経済地理学』の着想の源が、ジェイコブスだということだった。彼女の著書『都市の経済』はよほど独特であったのだろう。彼女の続書はこれに比べればそう興味を引かなかったが、こちらのほうは実に興味深いものであった。

彼女の議論とは、農業が発展する以前に、狩猟・採集人が最初に都市形成に到達したということだ。マルクス主義者や非マルクス主義者は、狩猟・採集人の平等主義社会は、あまり創造的で進歩的ではないと常に見なしていた。しかし、ジェイコブスは狩猟・採集人が最初に、物々交換や公正な取引を基盤として都市形成を導いたと説いた。都市は行商に非常に適しており都合がよかった。しかし狩猟・採集には都合が悪く、

もちろん農業にも適しているとは言えなかった。しかし皮肉にも都会生活を支え、維持可能にしたのは、都市ではなく農業であり、後々の農業改革の進展に大きく影響したのだ。ジェイコブスは、都市の地理学の中に何かを組み込まれていると仮定したのだ。進展、発展、空間的プロセス、空間的発展、空間的転換、革新の発生、創造力、芸術、経済、新事業などなど。ジェイコブスには非常に魅了された。

後に経済発展について彼女はすばらしい論説を発表するのだが、この基礎的な議論は真剣には受け取られなかった。ルフェーブルの議論にもあったが、すべてが都市と関わっているとすれば、都市そのものの存在なしで、どうやってすべてがまず存在できようか？ジェイコブスの発言に、もう一つ興味深いが非常に理解困難なものがある。都市の存在なしでは、私たちはみな貧困に陥る。全世界、全人類が、である。都市なしでは私たちは貧困であり、いまだに狩猟・採集生活を送っているということだ。これがまさに最も大胆な仮説といえよう。どんな表現が適当なのかわからないが、空間的因果関係、空間的説明と私は呼んでいる。これは地理学に向けた解明ではなく、地理学による解明なのだ。環境決定論とも言えない。物理的、環境的都市や環境的関心についてはないからである。

ここでは社会的に作り出された空間を意味している。それは常に変貌し続けるものであるが、天気や舞台セットのようなタイプの変貌ではない。しかし、自然地理を復元するとはどういうことか。私たちは自然地理に手をつけて変化させたのではない。私たちが復元した自然地理は、生成的、肯定的、強力であり、革新的で創造的なアイデアもまた生成的であるが、有害な環境問題でもある。生成的であると同時に抑制的であり、圧迫、主題、探求、フーコー、空間、知、権力などなど、必ずしもポジティブではなく、ネガティブな要素も人間生活の空間には存在するのだ。

今、個々の議論はそれぞれの顕著な専門を進展させて次の段階へ進行するのだ。そして農業社会の起源、次に、主にメソポタミアで生じた都市形成と改革、現代イラク、残念ながらその証拠を今戦争で破壊しているのだが、それらの

再理解へと私たちを導いてくれるのだ。州、帝国、官僚主義、階級主義の発生につながるのだ。社会形成に関するあらゆる家父長制社会、人間生活の世襲制社会が、私が称する第2の都市革命で発生するのだ。それからもうひとつの主要な改革である産業革命が起きるのだが、さきほども言ったように都市自体がまさに産業革命を起こさせたのだ。産業資本主義は、都市そのものが産業資本主義形態を作り出したと捉えるべきなのだ。

ポスト・フォード主義、そしてグローバリズムと続くが、今日研究されているこれら全プロセスも、やはり都市によって生成されている。何が生成しているかだ？凝集している結節性か、集積理論か。

地理学のカミング・アウト

私の同僚のマイケル・ストーパーが返答してくれた。「フェイス・トゥ・フェイス・コミュニケーションの力」を論じているが、私はそれに副題として「都市の経済力」とつけた。都市の経済力とは！なんと、それはすでに身近なアイデアではなからうか！私たちは今まで多くの面において地理学者について誤解したり、単純化したりしていた。今こそカミング・アウトできるのだ。地理学者や空間論者、老若男女、今皆がこの新しいアイデアを前向きに理解しようと始めている。この傾向の中で、私は空間論的転回を推進したいのだ。そして空間論的転回はすでに1995年くらいから始まっていたのだ。

今までにない異常に範囲が拡張された学問分野が今は存在する。東京でも私は議論したが、カルチュラル・スタディーズ、社会学、フィルム研究、美術史に携わってしようが、今はみな全員が地理学者であるべきなのだ。ところで、この美術史研究者たちが、地理学者よりも最初にポストモダン地理学に肯定的な関心を示したのだ。私のもとに集まってくる美術史研究者たちに興味津々に聞いてみた。なぜ美術史研究者がポストモダン地理学なのか、と。彼らの分野も20年代30年代と似たような事態を通過したというのだ。彼らの視点によると、歴史は抑圧

的だということだ。

視覚芸術、芸術の次元に関して、特に抑圧的だという。当然、これは芸術における空間的次元に関係してくる。美術史研究者たちは、歴史主義をまず批判しなければならなかった。彼らはそう表現はしなかったが、芸術と芸術批評に対する歴史的閉鎖は、同様に重要な視覚的空間の門戸を開けなければならなかった。彼らは実際に著述や理論化はしなかったが、ポストモダン地理学的理論に共鳴したのだ。今日のトークは前半の話で終わらせたい。空間論的転回の真価をまず認めたいと思う。幸運にも、すくなくとも日本の地理学界を含む、社会学、ポストモダン研究、メディア研究ではそれが前向きに検討されている。日本における空間論的転回は実に著しい。これは未来に前進するための任務でもあるのだ。自身の研究だけでなく、他者の研究

においてでも。みなさんには空間論的転回を次段階へとさらに推し進め、伝道していただきたい。大いに期待している。ありがとう。(拍手)

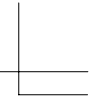
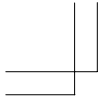
* 大阪市立大学COEのB班第13回研究会は、E・ソジャ氏と加藤氏の講演として、2003年8月11日の18時から20時まで、大阪市阿倍野区あべのメディックス7階 研修室Cで行なわれた。加藤政洋(流通科学大学)「『ポストモダン地理学』および空間論の受容に関する紹介」、E・ソジャ(UCLA)「『ポストモダン地理学』再訪」の順の講演であった。本稿は、そのときのソジャ講演を、長尾由美子がテープ起こしし、日本語に翻訳したものである。節分けやそのタイトルなどの若干の補筆を、水内俊雄(文学研究科)が行っている。

Revisiting "Postmodern Geographies"

Edward W. SOJA
(translated by Yumiko NAGAO)

In this speech, Edward W. Soja reflects on his long journey to write *Postmodern Geographies* (published in 1989), which traces back its origins as early as his doctoral days. Soja points out why space has always been ignored in the tradition of historicism. An encounter with Michel Foucault and Henri Lefebvre gave him a hint about the spatiality of social life. Soja develops their arguments into socio-spatial dialectic, and later extends it to what he calls the "trialectic" approach. It opens up a new approach as a spatial turn in geography. Now, inspired by Jane Jacobs, an urbanist, Soja reinvestigates the stimulus of urban agglomeration. Soja encourages pushing spatial thinking even further, not only in geography or sociology, but also in every other discipline.

Keywords : space, spatial turn, trialectic, postmodern, historicism



都市文化研究 3号 2004年

